

## こねる・まるめる・のぼす・なづける

---

～粘土遊びと保育者の関わりに関する一考察～

---

園名

氏名

修学院保育園

高森友莉奈

---

第1回アドバンスゼミに参加することになり、一緒に過ごしてきた子どもたちの“好き”は何か、と考えてみたところ「粘土遊び」に行きついた。子どもの力加減次第で自由自在に形が変えられる粘土。子どもたちを惹きつけるほどの魅力とは一体何か。また、子どもの傍らにいる保育者としての私には何ができるか、知りたい、考えたいと思い、本研究を進めてきた。私が担当していた1歳児クラスの子どもたちと一緒に粘土遊びをするなかでエピソードを集めた。今回は特に心に残った3つのエピソードを手がかりに、子どもの作品・保育者の関わり別に比較する中で、1歳児の保育において“ただ作る”ことの大切さ、子どもの表現を認めることの大切さについて考えた。さらにそこから保育の場における粘土の魅力、子どもの成長による自己表現のジレンマ、そして、保育の場で私が子どもの傍らにいる意味について考えを深めた。

これは今、保育士になって3年目を経ようとしている私の保育士人生のプロローグである。

こねる・まるめる・のぼす・なづける  
～粘土遊びと保育者の関わりに関する一考察～

修学院保育園 高森友莉奈

はじめに

今回、私が粘土遊びをテーマに実践研究を進めたきっかけは園長からのアドバンスゼミへの誘いだった。アドバンスゼミでは、大学の教授に協力していただき、自分で決めたテーマを元に実践研究を進めてきた。


私は担任している子どもたちが好きな「粘土遊び」をテーマに研究を始めることにした。0歳児クラスのと看から制作で使う紙粘土が大好きだった子どもたち。掴んだり落としたりびよんと伸ばしてみたり、触り方次第で自在に形を変える紙粘土に目をキラキラさせて笑う姿がとても印象的だった。1歳児クラスに進級し、自由に油粘土が使える環境が用意されると、自分が“やりたい”と思ったときに油粘土の蓋を開け、遊び始める姿があった。0歳児のときからよくしていた、ちぎったり、重ねたり、くっつけたりすることに加え、私たち大人の真似をして、こねたり、のぼしたり、道具を使ったりするようにもなった。そうして作ったモノを何かに見立てたり、友だちと覚えたばかりの言葉で「ちょうだい」「どうぞ」と粘土を渡したり受け取ったりする姿も出てきた。そのような子どもたちの姿から、子どもをこれほど惹きつける粘土遊びの魅力とは何か、保育者として私は何ができるか、知りたい、考えたいと思った。

第1章「3つのエピソードを読む」

本園で私が担当していた1歳児クラス（13名）では、子どもたちが自由に粘土を出して遊ぶことができるよう、蓋つきの衣装ケースに紙粘土、土粘土を1箱ずつ分けて入れた。初めのうちは大人がケースを開けて粘土を始めると子どもたちも集まってきた粘土あそびが始まっていた。だんだん子どもたちは“粘土をしたい”と思うと、自分で衣装ケースを引っ張ったり、蓋をあけたりして粘土を始めようとする姿が見られるようになった。子どもたちが好きなタイミングで粘土あそびを始めた時点で大人が傍について一緒に遊ぶ中で、私の心に残った3つのエピソードを取り上げ、保育の場の粘土遊びについて考えたい。

- ・エピソードを集めた期間：2023年6月初旬～2023年10月
- ・子どもたちが自由に粘土で遊べる環境にしていた期間：2023年6月初旬～2024年3月末
- ・粘土の種類：紙粘土『パールクレイ』、土粘土、油粘土

第1節 エピソード1の紹介

|            |   |   |
|------------|---|---|
| 活動日時       | 9月5日(火)10時ごろ  |   |
| エピソードのタイトル | 「Aくんアンパンマン作った」  |  |
| 背景         | 午前中の活動時間に3人の子どもたちから「粘土したい」と言われたので、1つのテーブルにみんなで粘土を運んでそれぞれ粘土をこね始めた。すると私の1番近くに座っていたDちゃんが「アンパンマン作って」と言った。そこで紙粘土を丸く平べったくした上に、眉毛や目、鼻、ほっぺた、口を私が作って一緒に乗せてあそんでいたときのエピソードである。   |   |
| エピソード      | <p>しばらくするとDちゃんの前に座っていたAくんが「Aくん、アンパンマン作った」と教えてくれた。Aくんの手元を見に行くと、4段ほど様々な形の粘土が重ねられたものがあった。正直なところ、アンパンマンと想像するには難しい見た目だったが、Aくんの言葉と“できたよ”が溢れている目から、これはAくんが作ったアンパンマンなのだ確信した。「わ！ほんまや！Aくんアンパンマン作ったね、すごいね！」と言うと、Aくんはうれしそうにウフフと笑い、すぐにグシャッと潰した。Aくんが作った記念に残しておきたいと思っていた私にとっては少し残念だった。少しすると「見て、Aくんまたアンパンマン作ったで」と言った。また見に行くと、先ほどと完全に形が一致しているわけではないが、同じように粘土が3段ほどに重ねられたものがAくんの前にあった。私に褒められると満足した様子で、これもまたすぐにぐしゃぐしゃにして、また新しいものを作り始めた。</p> <p>夕方、Aくんは急に私に「Aくんアンパンマン作ったで」と言った。そのとき、Aくんの近くに粘土もなければ、何かを持っているわけでも、作っているわけでもなかった。きっと今日の午前中の活動のことを言っているのだと思った。</p> |   |


Aくんが自分で作ったアンパンマンを見せてくれた瞬間、そのときのAくんの“できたよ”が溢れる目、言葉、作品どれもが愛おしく感じ胸を打たれた。作品をよく見てみると白い土台のような粘土に色がついた粘土が上からくっつけられている。このことからDちゃんと私のアンパンマン作りをAくんなりに模倣してアンパンマンを作ったと推測できる。ただAくんの言葉無しでこの作品がアンパンマンだとは理解しがたい。このように作品が具象化されないことが1歳児クラスの特徴でもあると思う。私がDちゃんと作ったような誰が見ても“ア

ンパンマン”に見える作品は“アンパンマン”でしかなく、そこに見立ては働かない。しかし、Aくんが作った“アンパンマン”には他の何かに見立てられる可能性を多く含んでおり、想像の自由度の高さを感じる。それもまた、この作品の魅力の一つだと思う。せっかく作った一度目のアンパンマンは私に認められるとAくんの手によってすぐにグシャッと潰されてしまう。1'どうしてすぐに潰してしまったのか。そもそもAくんの中で作品を残すという考えがなかったのかもしれない。思い返してみると、この時期に子どもたちが自分の意志で作品を残すという選択をする子はいなかったように思う。制作物はあったが、それは大人が子どもの作ったものを壊れないように保存しているだけで、子どもから「残して」と言われて保存していたわけではない。そもそもまだそのように自分の思いを言葉で伝えられる子も少ない。これらのことからそもそもAくんはまだ自分の作品を残すという発達段階には至っ

ていないとも考えられる。子どもが自分の作品を残す理由について考えてみると、その場  
 いない誰かに見せたいから、もしくは、またこの作品で遊びたいからではないかと思う。A  
 くんは私に認められたことで十分満足できたのかもしれない。満足したからもう一度その  
 満足感を感じたくてもう一度作り始めた可能性も考えられる。または、私とのやり取りを楽  
 しんでいたため作品にはそれほど執着がなかったのかもしれない。

そして夕方うれしそうに「Aくんアンパンマン作ったで」と言ったAくん。1歳児クラス  
 の子であるにもかかわらず夕方まで記憶が保持できていることに驚いた。きっとそれほど、  
 この1日のなかで“アンパンマンを作った”ことがAくんにとってとてもうれしかったのだ  
 と思う。このAくんのうれしさの中には、自分で作品を作ることができた満足感や達成感  
 だけでなく、担任からも認めてもらえたことによる自己肯定感の高まりとも言えそうな自  
 信がついたことによるうれしさもあったと思う。そのうれしさ、記憶、自信がAくんにと  
 って“また粘土がしたい”“自分で作りたい”に繋がるのではないだろうか。

## 第2節 エピソード2の紹介

|                |   |  |
|----------------|---|--|
| 活動日時           | 8月10日(木)10:00 ごろ  |  |
| エピソード<br>のタイトル | 「ころころちて」  |  |
| 背景             | 本格的に夏も始まり、晴れの日の中は水遊びをしている。この日も水遊びをしたあと、粘土が置いてある部屋に入ってきたBくんが紙粘土の入った箱を引っ張ってきて“やりたい”を伝えてくれた。そこで箱から粘土を出し、机の上に粘土板を用意するとBくんは粘土板の上で粘土をちぎり始めたときのエピソードである。   |  |
| エピソード          | はじめは粘土を小さく小さくちぎっていたBくん。パッと顔を上げると「ころころちて、ころころちて(ころころして)」と私に言ってちぎった粘土を渡してくれた。私は“ころころ?丸くするのかな?”と考え「こう?」と言って手の中で丸めて球体にした粘土を渡した。するとその形が合っていたようでBくんはうれしそうに受け取った。またすぐに「ころころちて」と言って粘土を渡してくれたので、私は先ほどと同じように粘土を丸め始めた。その間にBくんは、私が丸めた1つ目の粘土を、粘土板の上で転がしながら細長い棒状にしていた。私はBくんに「長くなったね」と伝えると「ながいっ!ながいっ!」とうれしそうに答えてくれた。 |  |

1人でちぎっているとき、  
 Bくんはまず“やりたい”と思  
 った粘土との対話を楽  
 しんでいたと思う。粘土の  
 程よい硬さや、冷たさ、安  
 心感、伸びる面白さ、ちぎ  
 る快感など様々な情報を  
 粘土から得たBくんは一  
 定の満足を得て、傍にいた  
 私を粘土遊びに誘ってく  
 れたのではないかと思う。  
 「ころころ」と言われても  
 様々な形が思いつくが、0  
 歳児クラスから一緒だっ  
 た私なら分かってくれる、  
 いや、分かって当たり前ぐ

らいにBくんは私のことを思っていたのかもしれない。私が球の粘土を渡すと“そうそう、

これこれ」とでも言うかのように受け取った B くん。次はその球をおもむろに細長くした。きつと球を触っているうちに偶然力の加減で細長くなったのかもしれない。そこに私が「長くなったね」と声を掛けるとうれしそうに「ながいっ！ながいっ！」と答えてくれた。私の言葉によって B くん作ったモノへの意味づけがなされた瞬間だったのではないか。初めは 1 人で粘土遊びを楽しみ始めた B くんだったが、そこから私とのやり取りを含めた粘土あそびを楽しんでいる。粘土を触るだけで素材の温度、質感、伸縮性、安心感、自在さなど様々な魅力に出会える。そんな粘土で“誰と一緒に”あそぶかが、粘土あそびをさらに豊かに発展させる要素の一つになるのではないかと感じた。

### 第3節 エピソード3の紹介

|            |  |
|------------|--|
| 活動日時       | 10月14日(土) 9時ごろ   |
| エピソードのタイトル | 「たっ！」<br>  |
| 背景         | 私はアドバンスゼミを数回重ねる中で、子どもにとっての完成「できた」について考え始めた。制作物にはある程度の大人が考えた完成がある。しかし、子どもたちが自由にあそぶ中にもきつと「できた」という瞬間があると思う。1歳児クラスでは言葉も未発達で、自分の思いを言葉にできる子はまだ少ない。その子たちの「できた」を見逃してしまっていないか、まだ言葉がたどたどしい子どもたちだからこその「できた」瞬間はどんな表情で、どう表現しているのか、今まであまり考えてこなかった。そんな私がまだあまり言葉が出ていなかった C くん「できた」に出会ったエピソードである。   |
| エピソード      | 土曜の0.1.2歳児混合保育の日のこと。普段とは違う部屋で始めは緊張で固まっていた C くんだったが、他の子が油粘土を始める姿を見て同じように1箱持ってきて遊び始めた。<br>ひたすら箱の中の粘土を小さく小さくちぎっては粘土板に置いていく。場所を選びながら置く姿からは C くんの中で1つ1つに思いがこもっているように見えた。箱の中の粘土を全てちぎった C くんは粘土板をそっと持ち上げて、少し離れた私に目をキラキラさせて「たっ(できた)！」と言って見せてくれた。そこに偶然部屋に来ていた副園長が「おいしそうだね、クッキー？」と C くんへ尋ねたが、C くんは首を振った。「チョコかな？」と続けて聞かれたが C くんは首をかしげながら、小さくちぎった粘土を乗せた板ごと持って私の元まで来た。そしてもう一度私の目を見て「たっ！」と言った。満足感があふれ出る C くん表情に私までうれしくなって「いっぱいできたね」と言うと、C くんはさらに目を輝かせて「っばいー！(いっぱい)」と言った。 |

この C くん「できた」に気付いたとき、子どもにとっての完成を大切にすることの真髓が見えたような気がした。今までの私だったら“もっと遊びが広がれば”、“見立てられるようになったら”という願いも込めて副園長が C くんへ話しかけたように「おいしそうだね、クッキーかな？チョコかな？」などと聞いていたと思う。それもまた C くん「できた」の成長を願うからこそその言動だと思う。今回、私は子どもにとっての「できた」を追う中で C くん「できた」に出会ったこと、気付けたことに心を動かされた。

このときの C くんは粘

土をただただちぎって並べる遊びに没頭していたのだと思う。それが何かに見える、見立てるのはこのときの C くんには必要のないことで、いっぱいちぎっていっぱい並べられたそこで一旦“完成”したのだと C くん表情から伝わってきた。それほど箱の中のすべての粘土をちぎって並べたことによる達成感、満足感で C くんは満たされていたのだと思う。それを少し離れたところにいた私に見せに来てくれた C くん。自分の中の“できた”を他の誰でもない私に 1 番に見せに来てくれたことがとてもうれしかった。できたものを見せてくれたとき、見立てているわけではないということは伝わってきたのでどのように声を掛ければいいのか一瞬悩んだ。しかし C くんは満足感溢れる“やりきった”“できた”という表情を見た途端、私までうれしくなって「いっぱいできたね」と自然に出た。その「いっぱい」がこのときの C くんには意味は分かっていたかもしれない。しかし、C くんはうれしに共感した私から出た言葉に C くんも共感してくれたように思う。まさに 2 人が共鳴した瞬間だったのかもしれない。

#### 第 4 節 本章のまとめ

この 3 つのエピソードには、三者三様の“できた”があり、作品が出来上がった。どの作品も子ども自身で潰したり、塊に戻したりすることでその遊びを“おしまい”にしていたため今は残っていない。しかし、その場に自分が作ったモノとしての作品があったことは紛れもない事実であり、その作品が子どもたちの“できた”を具現化している。この“できた”作品に焦点を当てると、三者三様のできるまでの過程がある。その違いは一体何か。

また、どの“できた”にも保育者の関わりが必要不可欠であることが 3 つのエピソードを通して改めて分かった。保育者が関わることで結果として子どもたちの自己肯定感が高まっている。これは〈大人-子ども〉の関係が強い 1 歳児クラスだからこそ保育者の関わりが鍵になっているのだと思う。それぞれのエピソードでの保育者の立ち位置の違いはあるのか。

次章からはこれら 3 つのエピソードを手がかりに子どもの作品、保育者の関わりに焦点を当てて比較検討する。

### 第 2 章 「2 つの視点からエピソードを比較する」

#### 第 1 節 作品を比べる

先に取り上げた 3 つエピソードの“できた” (=作品) に注目したい。

A くんは作る前からアンパンマンのイメージが自分の中にあり、それを自分なりに作ることができた。それゆえ制作過程で A くんは、自分でアンパンマンを作ることができたことによる達成感を感じていたのではないだろうか。

Bくんは球体から偶然細長い形を作ることができた。偶然できた作品だが、そこに保育者の言葉掛けも加わり「ながい！」という作品が出来上がった。Bくんは自分が作ったモノに、言葉による意味づけがなされたことで達成感を得たのではないか。そう考えると、AくんとBくんの“できた”には元からイメージしていたものを作ったかどうかの違いはあるものの、作品そのものが“できた”に繋がっている。そしてさらに、作品には「アンパンマン」や「ながい！」と言った名前が付けられたり、見立てが働いたりしている。

Cくんは、箱の中に入った粘土を全て並べられたことによる達成感、満足感そのものが“できた”に繋がっている。Cくんにとって手元にある粘土をちぎり、置き、場所を選んで並べる行為そのものが、“できた”だったのではないか。さらにCくんの“できた”には見立ては働いていないことが副園長とのやり取りから分かる。これはAくんやBくんの“できた”とは異なる“できた”であり、描画になぐりがき<sup>2)</sup>があるように、粘土における『なぐりづくり』とでも言えるようなものなのかもしれない。もし、描画のように粘土にも『なぐりづくり期』といったものがあるとすれば、これは0.1歳児の粘土遊び特有のもののように思う。なぜならば、言葉の発達に伴って見立てが働くようになるからだ。見立てが働くことでそこからごっこ遊びが広がっていく。今回のCくんがいっぱい作ったものも、大人からの働きかけでクッキーやチョコレートになっていたとしたら、そこから二人で食べてみるといった遊びに展開していたかもしれない。しかし、そこに見立てが働かなかったからこそCくんはいっぱいできた行為そのものを楽しんでいたと推測できる。もちろん、いつかCくんにも自分で作ったものを見立てられるようになってほしいという願いはある。しかし、Cくんのような“ただ粘土と遊ぶだけ”といった経験が、見立てに先行して必要であることは、描画におけるなぐりがきと同じだと思う。個人差はあるが、早い子だと1歳ごろから言葉が出始める。自分の思いや考えを言葉にできるようになり、見立てができるようになるまでには時間が必要だが、多くの“ただ作る”“ただ描く”を経験し、その経験を身近な人、大好きな人に認めもらえるかが、0.1歳児の保育には大事なのではないだろうか。

## 第2節 保育者の関わりを比べる

本節では保育者の関わりについて検討するが、まずは作っている子と私（保育者）の位置関係に注目してみる。

エピソード（以下、E-）1ではAくんと私は同じテーブルで斜めに向かい合って座っており、私はDちゃんと粘土遊びをしている状態だった。その後、Aくんに呼ばれ見に行き、できたことを「すごい！」と認めはしたが、Aくんのアンパンマン作りそのものには全く加担

していないため、A さんと私は間接的な関わりだと言える。同様に、E-3 の C さんの粘土遊びにおいても、私はチラチラと C さんの様子を見守ってはいたが、全く別の場所で他の子の遊びについていたため、やはり間接的な関わりであった。一方で、E-2 の B さんと私は一緒に粘土遊びを楽しんでおり、直接的な関わりだった。B さんのように直接的な関わりの中での粘土遊びでは、B さんの“できた”にも気付きやすく、B さんも私に“できた”を当然のことのように伝えてくれる。そのため直接的な関わりの方が、保育者が子どもの“できた”に気付きやすく、子どもの自己肯定感が高まるような声掛けや関わりが容易である。しかし、今回の 3 つのエピソードの考察において、どの子からも自己肯定感の高まりを感じた。それは間接的な関わりだった A さんと C さんから私へ“できた”を伝えてくれたからだと思う。2 人からのアプローチ無くして、私はそれぞれの“できた”には気づけず、2 人の“できた”を認めることもできなかつただろう。どうして一定の距離感があったにもかかわらず、A さんと C さんは私に“できた”を伝えてくれたのだろうか。ここでもう一度、E-1、E-3 を振り返ってみる。

E-1 ではその部屋にいる大人は私だけであったことから A さんが私に“できた”を見せてくれたのは必然だったのかもしれない。“できたものを見せたい”という気持ちはいつから芽生えるのかについての検討は必要だが、このとき A さんが私にできたものを見せ、私から認められたことがうれしかったということは夕方の A さんの姿が裏付けているように思う。夕方は私以外にも 2 名担任がいる環境だった。そのなかで私を選んで話に来てくれた。午前中のアンパンマン作りを知っているのは私だけということもあったかもしれないが、他の保育者に「A さんアンパンマン作ったで」と言えば、目の前に作られたアンパンマンがなくともある程度のニュアンスは伝わり認めてもらえると思う。そう考えると、A さんが私に話しかけてくれたのは、私が午前中の活動を知っているからという理由だけでなく、私に認められたことも含めて“アンパンマンを作った”ことがその日 1 日の中で心に残っていたからではないかと思う。一度作ったアンパンマンをすぐに潰してまた作って見せてくれたのも、私に認められたことのうれしさからきた行動だったとしたら、子どもの“できた”を認めることの大事さが改めて強く感じられる。そして、直接的に関わることが子どもの自己肯定感が高まる手段の全てではないことに改めて気付いた。

E-2 では、C さんと私の間には A さん以上の距離があった。ただし、このとき C さんが粘土遊びを始めてから離れている私と何度か目が合っていたので、お互いに相手がどこにいて何をしているかは分かっていたように思う。そして C さんが箱の中の全ての粘土をち



ぎり、並べ終えたとき、1番に見せようとしてくれたのは他の誰でもなく私だった。このときはきっと私が担任だからという理由だけかと思っていた。しかし、よく考えるとできるまでの過程を私が見守っていることにCくんも気付いていた可能性もあったのではないかと考えた。目が合うたびにCくんは“この人に見せよう”と思ってくれていたのかもしれない。自己肯定感自分がしたことを他者から認められることで感じられる。さらにその他者が自分にとって1番好きな人、大事な人だとより強く自己肯定感が高まると言う。以上を踏まえると、普段から生活をともにする大人の存在は子どもにとって大きく、その人に認められたい、認めて欲しいという思いが子ども自身は意識していなくとも感じているように思う。また粘土遊びにおいて、子どもの自己肯定感が高まる上で、大人の関わりが直接的か間接的かは関係ないのではないと思う。子どもにとっては誰に自分の“できた”を認めてもらえるかが大事なのだと思う。そしてありのままの“できた”が認められることで、また粘土遊びを“やりたい”という気持ちに繋がっているのではないと思う。

### 第3章「保育者が子どもの傍らにいることの意味」

#### 第1節 子どもと保育者のあいだにあるものとしての粘土

そもそも「粘土」について調べてみると「岩石が風化や熱水作用によって分解してできた微細な粒子の集まり。地質学では粒径256分の1ミリ以下、土壌学では0.002ミリ以下をいう。水分を加えると粘着性と可塑性を示し、乾くと硬くなる。陶磁器、耐火物などの原料にする。ねばつち。」(デジタル大辞泉)とある。さらに粘土について参考文献を読み進めると粘土のおもしろさや深さに驚く。もちろん保育者が粘土のことを知ることは保育の素材として扱う上で大事だと思う。一方で子どもたちにとってはどうなのだろうか。今回の実践研究を通して、子どもたちはそのような知識無しで、粘土をこねたり、まるめたり、のぼしたり、なづけたりして純粋に粘土遊びを楽しみ、粘土のおもしろさや深さを経験として知らず知らずのうちに感じていることに気付いた。保育の場の同じ造形活動でも絵を描くことはまた少し違い、よりダイレクトに素材に触れながら自分の力加減で形を変えられる粘土。その分、短時間で集中しやすく、乳児にとっても遊びに没頭しやすい素材なのかもしれない。また、子どもたちと一緒に粘土遊びをするなかで、各々こねている粘土は違っても、作っているものや“できた”が違っても、“1つの環境の中で粘土をこねている”だけでなぜか一緒に遊んでいるような不思議な感覚に浸った。この感覚は、まだ自分の思いを言葉で表現することがたどたどしい0.1歳児保育において、言葉を超えて互いのことをより分かり合える瞬間にもなっているのではないと思う。粘土は子どもと保育者を、言葉の垣根を越えて

結び付ける不思議な力を持っているのかもしれない。

## 第2節 いま、2歳児クラスを担当して思うこと

私は今、そのまま持ち上がり2歳児クラスの担任をしている。2歳児クラスでも4月末頃に自由な粘土遊びをしてみたところ、新たな発見が2つあった。1つ目は子どもたち同士で言葉を介してイメージの共有ができるようになってきていることである。以前よりも自分の思いを言葉で伝えられるようになったことで、1人の作品が伝播していく。気付くと自由なはずなのに一定数の子どもたちがそれぞれの「ケーキ」を作っているということがあった。これは〈子ども－大人〉関係を土台にした〈子ども－子ども〉関係の始まりとも言える。2つ目はE-1のように抽象的だった作品がより具体的に実物に近い作品になっていることである。これは手指の器用さが上がっていることもあるが、自分の中での完成イメージがよりはっきりしてきたということも関係しているように思う。だからこそ、逆に「できない」と言う子も増えてきた。自分の中の完成イメージと自分のできることの不一致からだと思う。今、私はそのようなジレンマを抱えるようになった子どもたちの成長に喜びを感じつつ、その子がジレンマを乗り越えまた自分を惜しみなく表現してくれるときを、自分が作った作品に満足し「できた」と目を輝かせてくれるときを心待ちにしている。

## 第3節 保育の場で私が子どもの傍らにいることの意味

これまでのエピソードや考察から、日々の生活の蓄積によって築かれるその子との関係が子どもたちの“この人に見てほしい”に繋がり、そこから遊びが“楽しい”“またやりたい”に広がっていくのだという考えに至った。そして、このことは子どもだけに言えることではなく、私にとっても同じではないだろうか。子どもの輝く目、笑顔、たどたどしくも話してくれる言葉。そのどれもが私にとっては愛おしく、他の誰でもない私に伝えてくれる姿に“もっと一緒に楽しいことをしたい”という気持ちが膨れ上がっていく。この気持ちが明日の保育へと繋がっているのだと思う。もちろん、子どもと調子のいい時期だけでなく、悪い時期も一緒に過ごす。そこで築き上げられる信頼関係は子どもだけでなく、私にとってもかけがえのない自分の強みになる。保育の場で私が子どもの傍らにすることで、子どもたちのことを愛おしく思うだけでなく、そんな自分のことも好きになれるのだと思う。保育の場において、子どもも大人もお互いの存在を認め合うことが互いの自己肯定感の高まりに繋がっているのではないだろうか。そして保育者は常に、子どもと築き上げられる関係の中で、これらの過程を生きているのではないだろうか。

おわりに

私が保育士になってもうすぐ3年が経とうとしている。幸せなことに0歳児クラスから3年連続同じ学年の担任をさせて頂き、子どもたちとはこれ以上ない信頼関係を築き続けている。これからまだまだ続く私の保育士人生の中で、初めて担任した大好きな子どもたちとの記録を、拙いながらもこのような形で残すことができたことを心からうれしく思う。

本研究を進めるにあたり、アドバンスゼミ指導講師として終始ご指導を賜った、大谷大学教育学部長教育学部幼児教育コース富岡量秀教授に感謝を申し上げたい。また、3つのエピソードに出てきた子どもたちや園長をはじめ同僚の職員の皆さんにも深い感謝の意を表したい。

### 引用・参考文献

- 中川織江 (2005). 『粘土遊びの心理学』. 風間書房
- 鯨岡峻(1997). 『原初的コミュニケーションの諸相』. ミネルヴァ書房
- エリック・H・エリクソン(2011). 『アイデンティティとライフサイクル』. 誠信書房
- 二木武(1993). 『ボウルビィ母と子のアタッチメント』. 医歯薬出版
- 和久洋三 (2006). 『遊びの創造共育法③ 円柱の遊びと造形』. 玉川大学出版部
- ティム・インゴルド (2017). 『メイキング』. 左右社
- 田中友香理 (2020). 『発達科学から読み解く 親と子の心』. ミネルヴァ書房
- 室田一樹 (2016). 『保育の場で子どもを理解するということ』. ミネルヴァ書房
- 室田一樹 (2013). 『保育の場に子どもが自分を開くとき』. ミネルヴァ書房
- 伊藤亜紗 (2020). 『手の倫理』. 講談社
- 松本健一 (2003). 『砂の文明・石の文明・泥の文明』. PHP 研究所
- 坪田晨歩 飯野祐樹(2023). 『粘土表現の歴史的変遷過程に関する研究』(乳幼児教育学研究) 第32号, pp.27-40
- イーガオジャパン合同会社.“癒しツアー”. パブロ・ピカソの名言・格言集。情熱と革新の言葉.2022. <https://iyashitour.com/archives/22678>
- DIGITALIO.“デジタル大辞泉「粘土」の意味・読み・例文・類語”.コトバンク. 2020.8.[https://kotobank.jp/word/%E7%B2%98%E5%9C%9F-111710#goog\\_rewarded](https://kotobank.jp/word/%E7%B2%98%E5%9C%9F-111710#goog_rewarded)

---

<sup>1</sup> パブロ・ピカソの格言「いかなる創造活動も、はじめは破壊活動だ。」(「パブロ・ピカソの名言・格言集。情熱と革新の言葉」より)

<sup>2</sup> なぐりがき (スクリブル)